

福井城跡 B 地点

—一般府道余野茨木線建設工事に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

序 文

本書で報告します福井城跡B地点は、一般府道余野茨木線建設工事に先立ち試掘調査を実施し、室町時代の遺構と遺物を新たに発見したことから新規の埋蔵文化財包蔵地として周知した遺跡であります。

東に隣接します福井城跡は、楠木正成によって築城されたと伝えられ、大安7（1527）年に落城した城として史料に記されていますが、往時の姿を偲ばせるものはあまり残されていません。

今回報告します福井城跡B地点は平成30年度に発掘調査を行い、鎌倉時代から室町時代にかけての土坑・溝などの遺構と遺物を確認することができました。

これらは、福井城跡B地点における土地利用の歴史及び福井城跡の実態解明に新たな知見を加える貴重な成果ということができます。

最後になりましたが、調査の実施にあたり、地元関係者ならびに大阪府都市整備部、大阪府茨木土木事務所、茨木市教育委員会の方々には多大なご協力をいただきましたことに深く感謝いたします。

令和2年3月

大阪府教育庁文化財保護課長
大野 広

例　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて平成30年度に実施した、一般府道余野茨木線建設工事に伴う、茨木市東福井三丁目所在の福井城跡B地点の発掘調査報告書である。
2. 試掘調査は文化財保護課調査事業グループ技師　市川　創、発掘調査は文化財保護課調査事業グループ主任専門員　橋本高明、同グループ専門員　小林義孝を担当者として実施した。
3. 遺物整理は、文化財保護課調査事業グループ技師　奈良拓弥、調査管理グループ専門員　阪田育功を担当者として実施した。
4. 試掘調査の調査番号は18033、発掘調査の調査番号は18046である。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は発掘調査担当者が行い、遺物写真の図版7～図版10aはイトーフォトに委託した。
6. 発掘調査にあたっては、空中写真測量を株式会社ウエスコ、図化作業を株式会社ケーディーエムにそれぞれ委託して実施した。
7. 遺物写真の図版10b、樹種同定・年代測定及び鉄製品の保存処理については、株式会社文化財サービスに委託し、その成果を第2章第4節に掲載した。
8. 本書の執筆及び編集は、文化財保護課調査事業グループ技師　奈良拓弥が行った。
9. 発掘調査の出土遺物や写真・図面等の記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
10. 発掘調査・遺物整理にあたっては、以下の方々よりご指導・ご教示・ご協力いただいた。
茨市教育委員会、大阪府茨木土木事務所、上自治会(順不同)
11. 発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。

凡 例

1. 本書で用いる座標値は世界測地系(国土地理座標第VI系)に基づき、方位針は座標北を示す。水準値はT.P.値(東京湾平均海面)を用い、本文および挿図中ではT.P. +○mと表記する。
2. 遺構番号は、遺構の種類に関係なく、検出した順に付している。これは発掘調査での記録と合致する。また、掲載遺物に付した番号は通し番号で、挿図と図版の番号は一致している。
3. 土層および遺物の色調については、『新版 標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄 / 2006年度版)に拠る。
4. 遺物実測図の断面は、須恵器・陶器・磁器を黒塗り、瓦器・瓦質土器を網伏せとし、その他を白抜きとした。
5. 引用・参考文献は第2章第4節については節末に記し、その他は巻末に一括した。

福井城跡B地点

-一般府道余野茨木線建設工事に伴う発掘調査-

序 文

例 言

凡 例

目 次

| | |
|----------------|----|
| 第1章 調査の経過と調査方法 | 1 |
| 第1節 調査の経緯と経過 | 1 |
| 第1項 調査にいたる経緯 | 1 |
| 第2項 調査の経過と方法 | 2 |
| 第3項 位置と歴史的環境 | 2 |
| 第2章 調査の成果 | 7 |
| 第1節 A・B地区 | 7 |
| 第2節 C地区 | 8 |
| 第1項 基本層序 | 8 |
| 第2項 検出した遺構 | 8 |
| 第3節 出土遺物 | 12 |
| 第4節 自然科学分析 | 16 |
| 第3章 総括 | 20 |
| 引用・参考文献 | 21 |
| 遺物観察表 | 22 |
| 抄録 | |

挿図目次

| | |
|--------------------|----|
| 図 1 調査地位置図 | 1 |
| 図 2 試掘調査位置図 | 3 |
| 図 3 調査地区割り図 | 3 |
| 図 4 福井城縄張り復元図 | 4 |
| 図 5 周辺の遺跡分布図 | 5 |
| 図 6 A・B地区壁断面図 | 7 |
| 図 7 C地区北壁断面図 | 9 |
| 図 8 C地区遺構平面図 | 10 |
| 図 9 土坑1平面・断面図 | 11 |
| 図 10 包含層出土遺物実測図 | 13 |
| 図 11 遺構出土遺物・鉄製品実測図 | 15 |
| 図 12 曆年較正結果 | 17 |
| 図 13 炭化材顕微鏡写真 | 18 |

付表目次

| | |
|-----------------|----|
| 表 1 放射性炭素年代測定結果 | 17 |
|-----------------|----|

図版目次

| | |
|-------------------|--|
| 図版 1 調査区Cの遺構(1) | 図版 7 調査区C包含層出土遺物(1) |
| 図版 2 調査区Cの遺構(2) | 図版 8 調査区C包含層出土遺物(2)及び調査区C 遺構出土遺物(1) |
| 図版 3 調査区Cの遺構(3) | 図版 9 調査区C遺構出土遺物(2) |
| 図版 4 調査区Cの遺構(4) | 図版 10 調査区C遺構出土遺物(3)及び鉄製品(1) |
| 図版 5 調査区Cの遺構(5) | |
| 図版 6 調査区Cの地層断面(1) | |

第1章 調査の経緯と調査方法

第1節 調査の経緯と経過

第1項 調査にいたる経緯

今回の発掘調査は、一般府道余野茨木線建設工事に伴うものである。

今回の事業箇所は、当初は遺跡外であったが東側に隣接する福井城跡において茨木市教育委員会が発掘調査を行い福井城に関連する遺構を検出しており、当事業箇所においても福井城に関連する遺構が広がっていることが予想された(図1)。そこで、大阪府都市整備部茨木土木事務所と大阪府教育庁文化財保護課は、その取扱いについて協議を行い、平成30年10月に試掘調査を実施した(調査番号:18033)。

試掘調査は事業対象地内に4箇所の調査区を設定し実施した(図2)。1区では遺構・遺物は検出できず、2区ではわずかに土師器などが出土したが二次堆積によるものであり、遺構は検出できなかった。3区は土師器・須恵器などが出土した。遺構は認められなかったものの、4区の遺構検出面と同一と認められる地層が存在した。4区においては、中世の遺構・遺物を確認した。この調査成果に基づき文化財保護法第97条の発見通知が大阪府都市整備部より提出され、平成31年1月に新たに埋蔵文化財包蔵



図1 調査位置図

地「福井城跡B地点」として周知した。

福井城跡B地点という名称は、試掘調査において検出した遺構は福井城跡そのものを確認したものではなかったため福井城跡の包蔵地範囲を拡大するのではなく、福井城跡と関連する遺構が広がる遺跡として福井城跡B地点という名称を付したものである。

この新たな埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて引き続き大阪府都市整備部と協議を重ね、大阪府都市整備部から依頼を受けて平成31年2月より発掘調査を実施した。

第2項 調査の経過と方法

調査は、試掘調査で設定した3区の土地区画に対して十字のトレントを設定し、また試掘調査で遺構を検出した4区がある土地区画に対しては、事業計画範囲を平面調査した。

調査区の区割りは、十字トレントの東西分をA地区、南北部分をB地区、平面調査を実施した区画をC地区とした(図3)。

調査は、平成31年2月1日に開始し、平成31年3月20日に完了した。調査面積は合計190m²である。

発掘調査は、現代と近世の耕作土を機械で除去した後、それ以下の地層を人力によって慎重に掘削し、遺構の検出及び遺物の採用に努めた。人力による掘削はスコップや鍬籠等を使用し実施した。

遺構番号は、遺構の種類に関係なく、検出した順に付している。これは発掘調査での記録と合致する。

調査区の平面測量は、ラジコンヘリによる空中写真測量を行い50分の1の図面と一部20分の1の図面を作成した。それとは別に、土の堆積状況を示す断面図や各遺構の詳細図面をエスロンテープやメジャーを用いて作成した。写真撮影は6×7カメラとデジタルカメラ(APS-Cセンサー)を使用して撮影を行った。調査期間中の平成31年3月20日に地元住民向けに遺跡を公開し、31人の参加があった。

第3項 位置と歴史的環境

福井城跡及び福井城跡B地点は、茨木市東福井三丁目に位置し、地質区分では低位段丘に立地する。

当遺跡が立地する段丘は、北に北摂山地の山がせまり、西側は茨木川の上流である佐保川によって崖が形成される。東側には小さな谷があり、段丘全体は緩やかに南に傾斜する。段丘の頂部に立てば南に西国街道を望み、遠く淀川や大阪平野をも見渡すことができる。

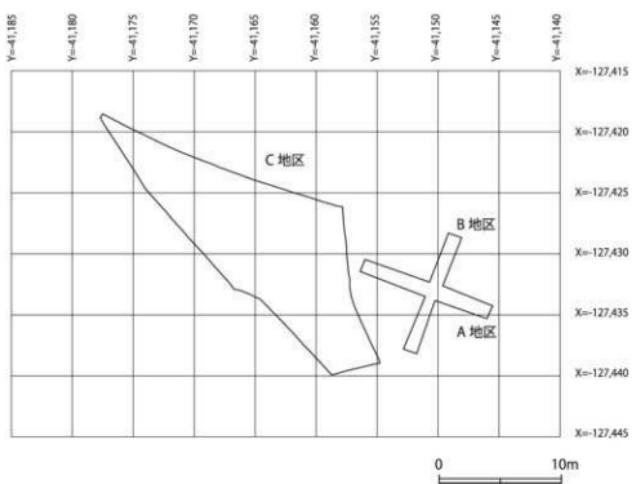
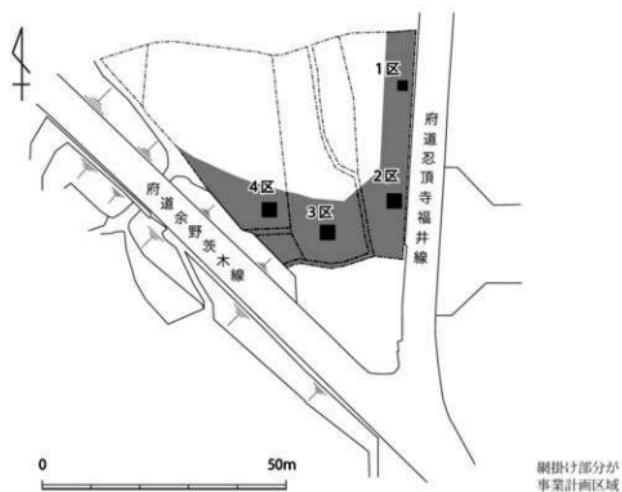
現在、周囲は段丘平坦面を利用した耕作地と宅地が形成されおり、山地部分は住宅や工場等の大規模な開発により削平され平坦地に改変されている。

福井城跡

福井城に関する文献はあまり残されておらず、詳細を知る手掛かりは少ない。

『蓮如上人全集』(大谷1998)にある紀行文的性格を持つ「有馬路」に、蓮如が文明15(1483)年に有馬湯治へと出向いた際に、「其道すがらをいえば、中城惣持寺と云て、米たけの觀音のまします寺を右に見て、其より大田河原之末を渡りゆき、ぬかつかのこしをとり、福井ガ城を右にみ、同じく岩井ガ城も右にみ」て、石田の茶屋を通り過ぎたと記載されており、当城を指しているものと考えられる。

蓮如が通行した道は現在の西国街道ではなく、勝尾寺川の北側にあったと推測されている(茨木市史編さん委員会2012)。



『細川両家記』では、大永7(1527)年に細川春元方の柳本賢治が細川高国方の茨木市域の諸城を攻め落とすが、「かように山崎成行ければ。攝州上郡芥川城。太田城。茨木城。安威。福井。三宅城悉く行く方々へ落行。」と記されており、福井城が大永7(1527)年に落城したことがわかる。同様の内容が『足利季世記』にも記述されている。

福井城に関する詳しい史料としては、東城兔幾雄が明治年間に編纂した『東摺城址図誌』がある。

『東摂城址図誌』の一節である「福井城記」によると、当城は建武年間に西国街道を守るために楠木正成により築城され、応安7(1374)年以後、摂津守護細川頼之が守護代を置き、五世の孫細川勝元の時は守護代として秋葉元明を置いたとしている。

また、『福井村沿革誌』(松木1911か)には、建武元(1334)年に楠木正成が当城を築き守護代を置いたと記されている。

中村博司(1981)は、土地の高低と「東撰城址図誌」に記載された字から当城の縄張を復元している(図4)。福井城跡B地点は、「出張」の字が残る区画として中村は城域の一部と考えている。

福井町については上記史料と小字の名称から、東福井三丁目の当地に所在すると推定されてきたが実態については不明な点が多くかった。こうした中、当地において平成27年に道路建設工事に伴う発掘調査が茨木市教育委員会によって実施され、中村が「三の丸」と推定する区画において13世紀～14世紀にかけての遺構と遺物が確認された(正岡2015)。

調査では、石列や盛土、堀などの遺構が検出され、盛土の上では無数の柱穴、井戸、鍛冶炉といった生活の痕跡を示すものが確認された。正式な報告がなされていないため、遺構の性格の判断については

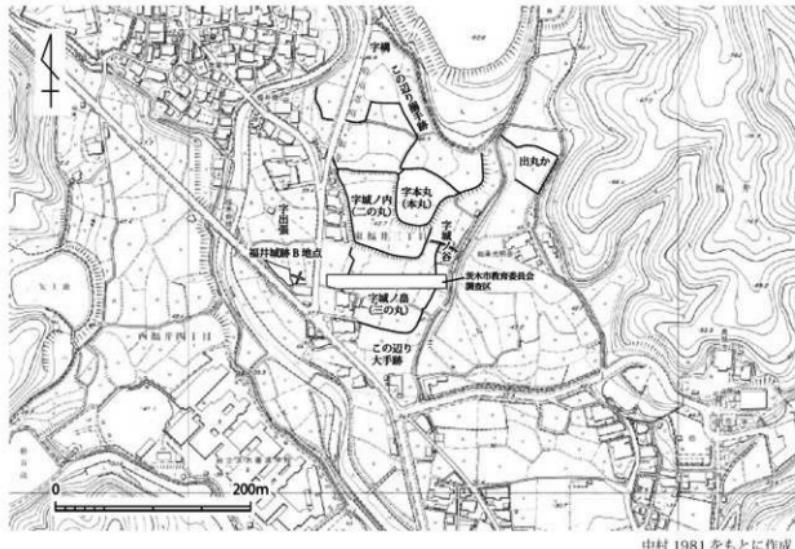


図4 福井城縄張り復元図

慎重を期す必要はあるが、これまでの推測どおり当地に福井城が存在したことを確認した成果と位置付けられる。

福井地域

次に福井地域の歴史的環境について時代順に概観する(図5)。

福井は南の勝尾寺川から北部の山間部まで、約4.6 kmにわたる範囲である。西側に宿久庄、東側に



1. 福井城跡 B 地点
2. 福井城跡
3. 東福井遺跡
4. 西福井遺跡
5. 新屋古墳群
6. 熊谷古墳群
7. 真龍寺第1号墳
8. 真龍寺第2号墳
9. 將軍塚古墳
10. 將軍山古墳
11. 將軍山古墳群第3号墳
12. 將軍山古墳群第4号墳
13. 將軍山古墳群第5号墳
14. 將軍山古墳群第7号墳
15. 將軍山第1地点遺跡
16. 紫金山古墳
17. 青松塚古墳
18. 南塚古墳
19. 海北塚北方遺跡
20. 海北塚古墳
21. 福井遺跡
22. 鳥居嶺道
23. 西国街道

図5 周辺の遺跡分布図

安威と隣接する。

この地域で縄文時代から弥生時代にかけては、平野部に広がる西福井遺跡で生活痕跡を見ることができる。縄文時代中期中葉～末にかけての土器が出土しているほか、後期の焼人骨を集積した土坑が検出されている。弥生時代前期には土坑・溝などが複数検出されており、集落が存在したと考えられる。

古墳時代は、前期の前方後円墳である紫金山古墳や安威地域にあたるが將軍山古墳が丘陵上に築造され、中期には西福井遺跡で方墳や円墳が11基築造される。後期になると北海塚古墳や青松塚古墳、南塚古墳といった横穴式石室を持つ古墳が築造される。また、丘陵上には円墳からなる群集墳が築造される。福井城跡の北にはかつて6基からなる熊谷古墳群が存在し、南側の新屋坐天照御魂神社が鎮座する宮山一帯には30基以上の円墳からなる新屋古墳群がある。東の向山と呼ばれる丘陵部に真龍寺古墳群や將軍山古墳群が存在する。近年、福井城跡に隣接する東福井遺跡において古墳時代後期の竪穴建物が12棟検出され集落が存在することが確認された(高村2015)。茨木市域においても福井は古墳時代の生活痕跡が密集する地域と言える。

飛鳥時代から奈良時代にかけては西福井遺跡において竪穴建物や掘立柱建物、井戸、溝などが検出されている。

奈良時代に東の丘陵に位置する真龍寺が建立され、平安時代には真如親王が大門・鐘楼・經堂その他21坊を建立したと伝えられる。16世紀末の文禄年間の検地帳によると新上坊・了光坊などの諸坊が記されており隆盛を誇っていたことが伺える。また、平安時代から鎌倉時代にかけてこの地域一帯は摂関家領福井荘として開発経営されていた。『和名類聚抄』巻第五の「島下郡」の項目には「新野 宿人 安威穂積」の四郷が記されており、福井地域一帯は新野郷であったと考えられている。

西福井遺跡では、鎌倉時代の大規模な方形の区画溝が確認され、区内には建物や井戸を複数配する居館跡が検出されている。性格については判然としないが、14世紀を中心には機能していたと考えられている。

延喜式に記載される新屋坐天照御魂神社は中世には島下郡の総社として崇敬をうけていたが、大永7(1527)年に上述した細川家の内乱により衰退した。茨木城主であった中川清秀の信仰が厚く、清秀が賤ヶ岳の戦いで戦死した後、天正12(1578)年にその妻が長男の祈願をこめて新たに社殿を造営したと伝えられる。その後、本殿は延宝6(1678)年に再建され、天保12(1841)に改造されている。

『福井村村誌』によれば、中川清秀以降、河尻秀隆・片桐且元などによって支配されてきたが、慶安2(1649)年より明治4(1872)年まで高櫻藩の藩主永井家によって支配された藩領であった。

江戸時代の特産品として福井村の上福井の地では、鑄物業が有名であった。『五畿内志』の摂津国之六島下郡の条には、「製造 鍋 犁 俱福井村出」と記されている。また、福井村鑄物師は梵鐘や半鐘作りでも活躍しており福井村鑄物師の銘を持つ鐘は島上・島下・豊島・能勢・西成郡に残されている。最も古い例として茨木市内の大門寺には、寛永19(1642)年に福井村惣介の名前が鐘に刻まれているが、本格化したのは18世紀になってからである。

南北を貫く道は、鳥居嶺道(別名: 清坂越道)とよばれ大坂天満橋から島下郡清坂峠にいたる全長28.7kmの街道であった。『五畿内志』にも記載があり近世には開通していたようである。この街道に面して設置されていた道標が、山手台中央公園の一角に移設されている。

第2章 調査の成果

第1節 A・B地区(図6)

十字のトレンチを設定し、東西をA地区、南北をB地区として調査を実施した。試掘調査の3区にあたる箇所であり、試掘調査では面積が狭く遺構の有無を判断できなかつたため、面積を広げて確認調査を行つた。各トレンチの長さは10m、幅は1mを測る。

基本層であるが、現在の表土及び耕作土を掘削すると下位に②層が認められた。②層の下には③・④層と統くがいすれも耕作土である。⑤層は、整地に伴う盛土と考えられる。C地区の⑦層に対応する層で中世の所産と考えられる。⑥層はラミナが認められることから水成堆積層であり、C地区の⑨層に対応する。

遺構は検出できなかつたが、土師器の破片が出土した。小破片であり明確な時期は不明である。

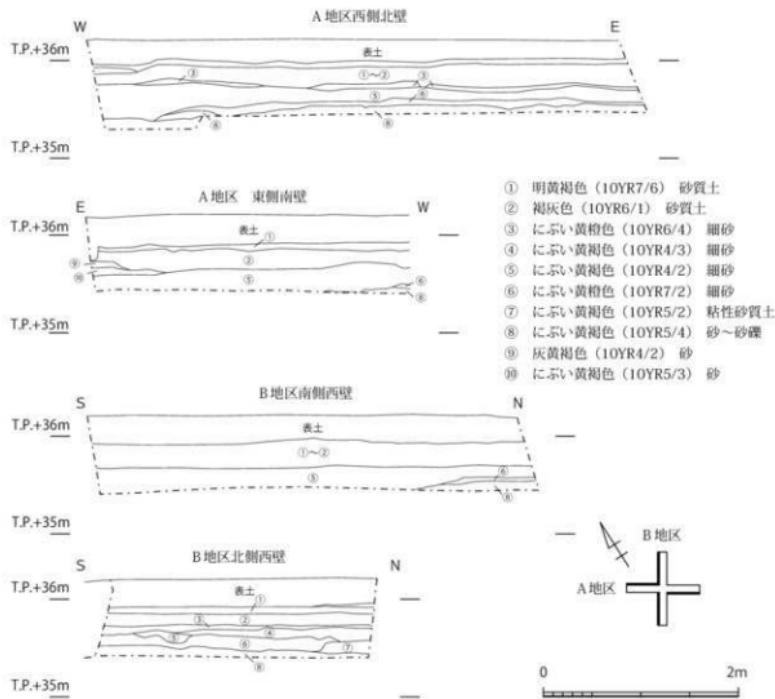


図6 A・B地区壁断面図

調査の結果、遺構は検出できず遺物も二次堆積によるものであることを確認したため、本調査の対象外とした。

第2節 C地区

調査区は耕作に伴う棚田となっており、南側は一段下がっている。この部分をC2区と呼ぶ。遺構は北側の上段部分でのみ検出できた。現代の耕作土を掘削すると段差部分に石垣が構築されていた。石垣の裏込めには近世の磁器が包含されており、近世中期以降に構築されたものと考えられる。

第1項 基本層序(図7)

調査区の南側においては一段下がっているため現代及び近世の耕作土を掘削すると後述する⑨層が認められた。ここでは北側の一段高い部分の堆積層を基本層序として説明する。①層は現代の耕作土である。現代の耕作土と床土を掘削すると③層が認められた。③層は部分的にしか見られないが、③層に相当する層として東側には④層が広がっていた。いずれも近世の耕作土と考えられる。③層を掘削すると⑤層が広がっていた。⑤層は厚さ10～20cmである。耕作に伴う整地土と考えられる。層内からは土師器・瓦器・瓦質土器・東播系須恵器・灰釉陶器・陶器・鉄製品・瓦などが出土した。出土遺物から14世紀後半から15世紀前半の所産と考えられる。⑤層を掘削すると⑨層と南側の一部に⑦層が認められた。遺構はこの⑤層下面で検出できた。⑦層は厚さ10cm前後の整地土である。土師器・土師質土器・瓦器・瓦質土器・東播系須恵器・灰釉陶器・陶器が出土した。14世紀中頃から14世紀後半の所産である。⑦層を掘削すると⑨層が認められた。⑨層にラミナが認められることから河川による堆積層と考えられる。⑨層の一部を掘削したところ、白磁・陶器・土師器・土師質土器・瓦器・東播系須恵器が出土した。13世紀後半から14世紀前半の所産である。

第2項 検出した遺構(図8・9)

土坑1

南北に長い隅丸方形の土坑で深さは14cmを測る。埋土は、焼土及び炭化材が充填されており骨の破片が出土した。骨は小破片のものばかりで被熱により白色化している。この骨が人であるのか動物であるのか鑑定していないため判然としない。土坑の底面南半に扁平な礫が設置されていた。埋土に含まれる炭化材の樹種同定及び年代測定を実施した。結果は、モチノキ属 calAD1310～cal1413、コナラ属コナラ節 calAD1412～cal1445であった(第4節を参照)。出土遺物は、中国製青磁(50)・土師器(51)・釘(76～78)が出土した。骨や炭化材の出土状況から火葬用土坑として機能していたと考える。遺物の年代は15世紀の所産であり、放射性年代測定の結果を踏まえると15世紀前半の時期に機能していたと考えられる。

焼土坑2

中心部分に焼土が認められた不定形な土坑である。深度は浅く埋土は基本層序の⑤層であった。埋土からは土壁が出土した。

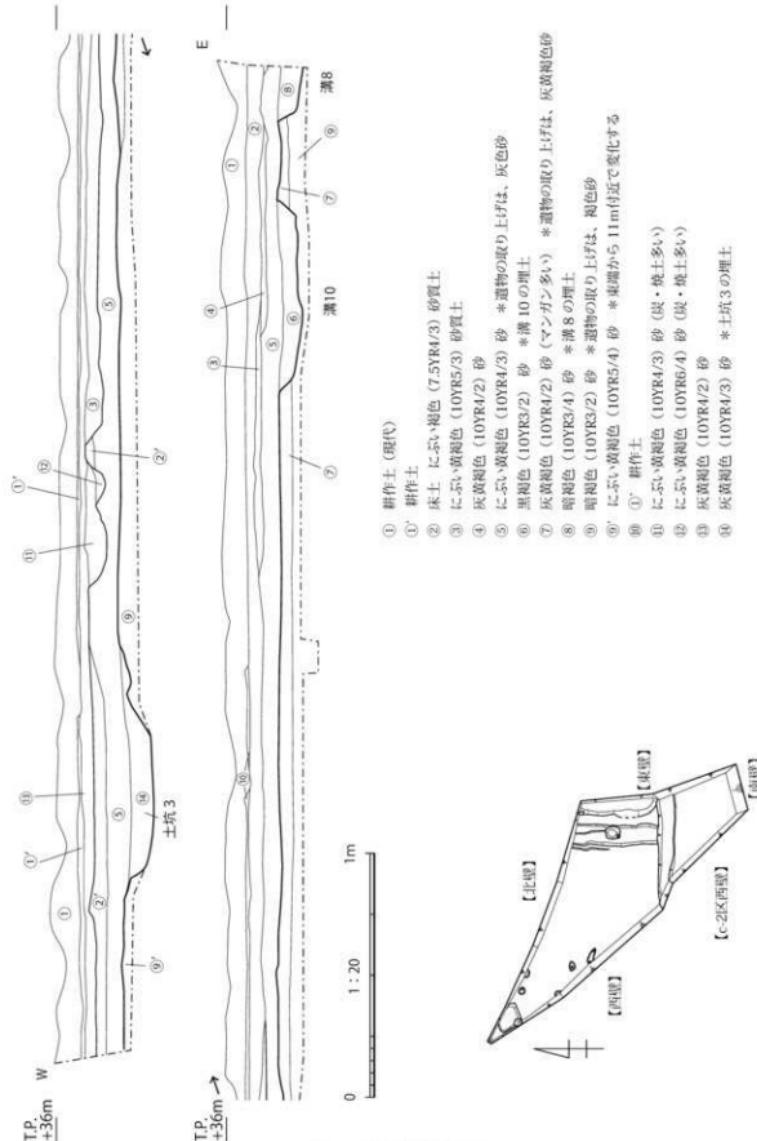


図7 C地区北壁断面図

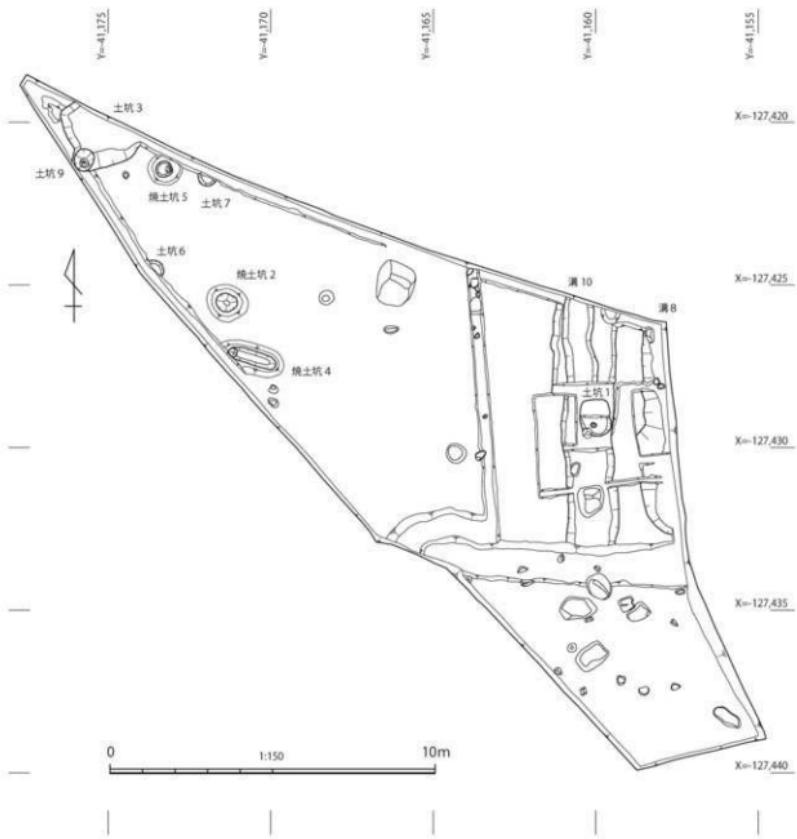


図8 C地区遺構平面図

土坑3

調査区の北端の部分において矩形を呈する土坑を検出した。2.0×1.8 mを測り、深さは40cmである。埋土は灰黄褐色砂であった。埋土からは、灰釉陶器・土師器・土師質土器・瓦器・瓦質土器・東播系須恵器・瓦が出土した。図化した土師器(52)は14世紀中頃の皿である。

焼土坑4

東西に長軸を持つ長楕円の土坑である。埋土からは、土師器(53)・土師質土器(55)・瓦器・東播系須恵器(54)・土壁が出土した。

焼土坑5

直径20cmを測る円形の土坑である。埋土には焼土の塊が認められた。土師器と土壁(56)が出土した。

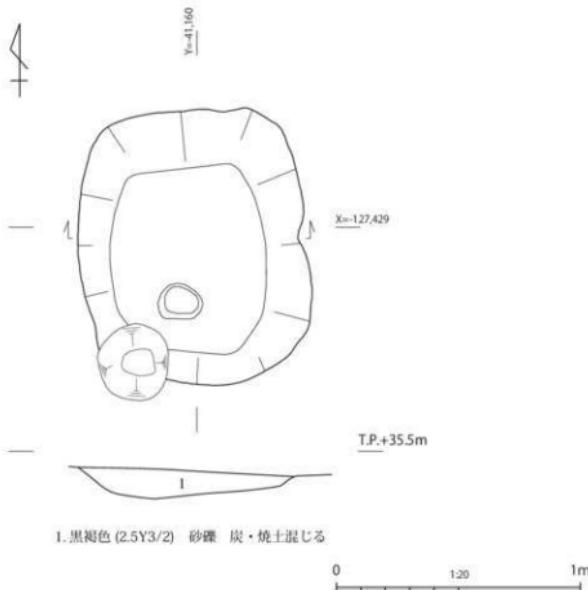


図9 土坑1平面・断面図

土坑6

調査区の西壁にかかるため全形は不明である。深さは24cmを測り、埋土は暗灰黄色砂である。土師器が出土した。

土坑7

調査区の北壁にかかるため全形は不明である。深さは9cmを測る。埋土からは土師器が出土した。

溝8

調査区の西端にあるため全形は不明であるが溝と判断した。検出した長さは南北で6.3mを測る。埋土は暗褐色砂からなり、深さは20cmを測る。土師器(57・58)・瓦器・鉄製品(75)が出土した。

土坑9

土坑3に切られており深さ30cmを測る。

溝10

土坑1の下層に位置し南北に軸を持つ溝である。後世の造成により南側は削平されている。検出部分で長さ6.8m、幅2.2mを測る。溝の北側は2段掘りになっている。埋土は黒褐色砂である。陶器・土師器(60～62)・土師質土器(63)・東播系須恵器・瓦器(59)・瓦質土器(64)が出土した。

遺構の時期であるが、上述のとおり⑤層下面において検出した遺構であることから、遺構についても14世紀後半から15世紀前半に機能していたと考えられる。遺構出土の土器もこの時期幅に収まる。

第3節 出土遺物

最も多く遺物が出土したC地区の遺物について説明を行う。

⑤層出土遺物(図10)

1～3は瓦器椀である。1は口縁部の内面には強いナデが施され、やや凹みを持ち内部に条線が見られる。幅の細いミガキがわずかに内面に残る。和泉型。13世紀後半。2は口縁部をわずかに外屈させ端部は丸く納める。内面にわずかにミガキが残る。和泉型。14世紀中頃。3は外面にユビオサエが残る。14世紀後半。4～10は瓦器皿である。4～6は外方へと直線的に伸び端部を丸く納める。内面にわずかにミガキが残り、体部外面にはユビオサエが施される。いずれも14世紀後半である。7・8は口縁端部内面の強いナデにより圓線が施される。15世紀前半か。9・10は口縁部は内湾し、口縁端部を丸く納める。内面はナデ調整である。15世紀前半。

11～22は土師器皿である。11～13は口縁部を外方へと屈曲させ、端部をわずかに上方へとつまみ上げる。14・15は口縁部と体部の境に明瞭な段を有し、ゆるやかに外湾せながら外方へと開く。16は、内面に刷毛目が施される。17～21は口縁部のナデにより、体部との境を作り出す。口縁部のヨコナデはやや幅が狭い。19は内面には刷毛目が残る。20は上部に向かって開く器形である。22はいわゆる「へそ皿」である。土師器皿はいずれも14世紀中頃から後半にかけての所産である。

23は瓦質土器壺である。口縁部を外湾させ、端部を下方へとわずかに拡張することにより面を作り出す。14世紀後半か。24は瓦質土器羽釜である。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は断面三角形を呈する。鰐部は水平に横へと伸びる。14世紀半ば。25は灰釉陶器椀である。口縁部をわずかに外方へと伸ばす。13世紀か。26は東播系須恵器鉢である。口縁端部を上方へと肥厚させ、口縁部の断面は三角形を呈する。14世紀半ば。27・28は土師質土器鍋である。体部から口縁部を大きく外屈させることにより外に開く口縁部を持つ。内外面ともに刷毛目が施される。13世紀代。29は丸瓦の玉縁部である。凹面には布目痕が残る。鎌倉時代の所産であろう。30は中国製青磁碗である。外面には片彫蓮弁文と底部付近に圓線が施される。14世紀末～15世紀前半。

⑦層出土遺物(図10)

30～35は瓦器椀である。30は口縁端部のナデにより体部と口縁部の境が明瞭である。端部は先端が尖った断面三角形を呈す。体部外面にわずかにミガキが残り、内面には密にミガキが施される。和泉型。13世紀前葉。31は内面にわずかに幅の細いミガキが残り、外面はユビオサエによる器壁の凹凸がやや目立つ。和泉型。13世紀後半。32～34は内面にわずかにミガキが残る。和泉型。14世紀中頃。35は、外面にわずかにユビオサエが残る。和泉型。14世紀後半。

36・37は土師器皿である。36は上部に行くに従い外方へと開く器形である。37は底部から口縁部にかけて大きく外屈させ口縁部は外へと開く。

38は白磁碗である。外方へと直線的に伸び、端部は方形になる。口縁端部内面の釉を剥ぎ取っており、いわゆる「口禿」である。13世紀後半から14世紀後半。39は土師質土器鉢である。口縁端部を上方へと拡張せしめく納める。端部内面の強いナデにより有段となる。14世紀代。40は東播系須恵器の鉢である。口縁端部を上方へと拡張し肥厚気味になる。14世紀代。41は備前焼の擂鉢である。体部は直線

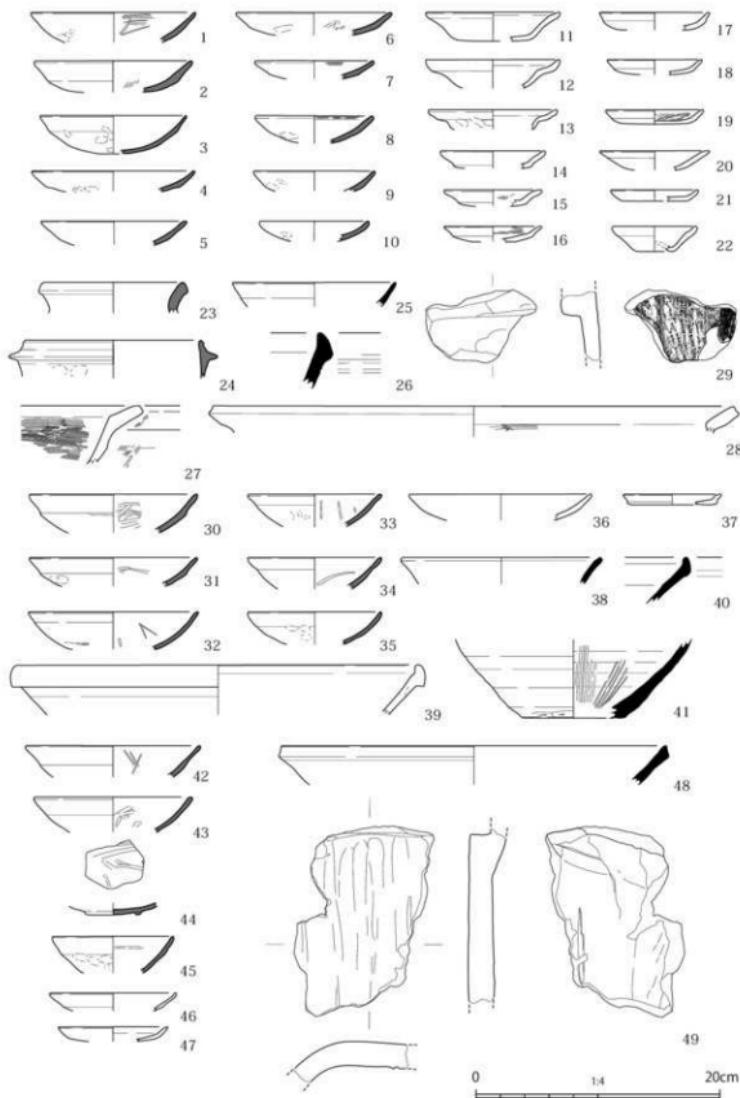


図 10 包含層出土遺物実測図

的に外方へと開き、内面に櫛描きによる放射状の擧目が施される。14世紀半ばから15世紀前半。

⑨層出土遺物(図10)

42～45は瓦器碗である。42・43は口縁部と体部の境は明瞭ではなく端部を丸く納める。内面にわずかにミガキが残る。13世紀後半。44は、器碗の底部である。断面台形の高台を持つ。見込みには、わずかではあるがミガキが残る。13世紀後半。45は内面にわずかにミガキが残る。14世紀前半。

45・46は土師器皿である。45は口縁端部はナデにより内挽気味に納める。器壁は薄い。13世紀後半～14世紀。46は器壁が薄く端部は鋭く納める。48は東播系須恵器の鉢である。口縁端部を上方へと拡張し、端部に面をもつ。49は土師質土器である。隅丸方形の平面形を呈する土器である。上部には直角となる肩があり口縁部へとつながる。口縁部は斜めになるように作られている。外面には縱方向にナデが施され、内面は刷毛目工具痕と考えられる押圧痕跡が残る。焜炉または風炉であろうか。

土坑1(図11)

50は中国製青磁皿である。外面には2重の圓線と弧状を描く線が施される。釉薬に貫入が認められる。

15世紀代か。51は土師器皿である。上方に行くに従い開く器形で、内面には刷毛目が残る。15世紀代か。

土坑3(図11)

52は土師器皿である。直線的に外方へと伸びる口縁部を持ち、底部と口縁部との境にはわずかな稜が見られる。14世紀中頃。

焼土坑4(図11)

53は土師器皿である。直線的に外方へと伸び、端部は鋭く納める。時期不明。54は東播系須恵器の片口鉢である。口縁端部を上方へと肥厚させ、口縁部は断面三角形を呈する。14世紀代。55は土師質土器羽釜である。やや内傾する口縁部に端部は上端のナデにより断面形は方形を呈する。外面には段を有する。14世紀代。

焼土坑5(図11)

56は壁の破片である。表面の平坦な面に白色土が薄く塗られている。裏面には、半筒形の圧痕が平行に2条あり、それと垂直となる方向にも1条の圧痕が認められる。胎土には、径1mm程度の砂と植物性の纖維圧痕がみられ筋が混ぜ込まれていたと考えられる。裏面の痕跡は壁下地である格子状の木舞の痕跡と考えられる。図化していないが他にも壁土の破片と考えられる焼土塊が認められた。しかし、白色土を塗布していたものは本例のみである。

溝8(図11)

57・58は土師器皿である。57は口縁端部内面の強いナデにより圓線が施される。58は内面に刷毛目を施す。いずれも15世紀前半か。

溝10(図11)

59は瓦器皿である。口縁端部は丸く納める。14世紀後半。60～62は土師器皿である。60は体部から口縁部にかけて外方へと屈曲させ、端部は内側へと納める。15世紀代か。61は口縁部のヨコナデにより体部との境を作り出す。15世紀代か。62は底部がくぼみ「へそ皿」となる可能性があるが判然としない。口縁部は直線的に外方へと伸び端部に段を有する。やや厚手である。15世紀前半。63は土師質土器羽釜である。口縁部は直立し鍔部は短くや上方を向く。内面には横方向の刷毛目を施し、鍔部

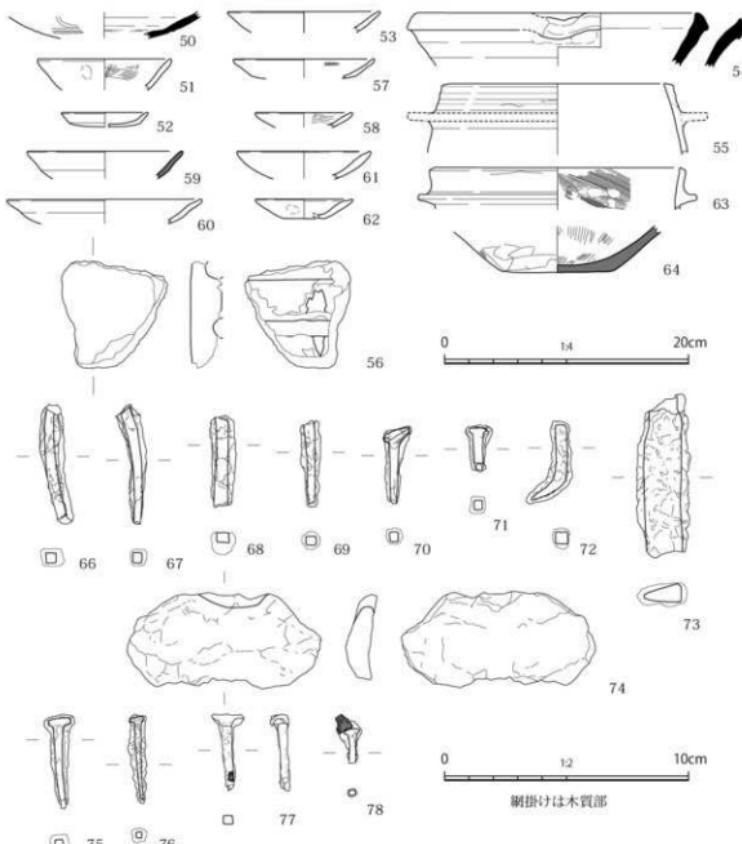


図 11 遺構出土遺物・鉄製品実測図

内面の上部にユビオサエが残る。14世紀中頃。64は瓦質土器擂鉢である。内面には刷毛目による擂目が残り、外面はケズリを施した後ナデによって仕上げている。14世紀中頃。

鉄製品(図 11)

66～72・75～78は断面が四角形を呈するいわゆる和釘である。頭の部分は、折れ曲がったもの(70・71・75・78)と巻頭のもの(77)がある。77・78には木質が付着している。77は釘の長軸に対して垂直となる木目が確認できる。78の木質は鋲に付着しており釘によって結合させた木材とは異なり後世の付着と考えられる。73は刀子である。74は釜であろうか。縦断面が弧状を呈する。鋳造品と考えられるが腐食が激しく器形は判然としない。

第4節 自然科学分析

はじめに

本分析調査では、B地点の調査で検出された土坑1から出土した炭化物について、放射性炭素年代測定および炭化材同定を実施し、遺構の年代観と植物利用に関する情報を得る。

1. 試料

試料は、福井城跡B地点C区土坑1より採取された炭化材1試料である。試料には40～50片ほどの炭化材が入っている。大きさは1～3cmで、接合関係は不明である。

2. 分析方法

(1) 炭化材同定

40～50片ある炭化材の中から、保存がよく大型の試料を20片選ぶ。剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の各割片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

(2) 放射性炭素年代測定

炭化材同定を行った結果、2種類の木材が確認されたので、各種類から1点ずつを分析用試料とする。試料は、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、¹⁴Cの計数、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹³C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いる較正曲線はIntcal13(Reimer et al.,2013)である。

3. 結果

(1) 炭化材同定

結果を表1に示す。炭化材は、広葉樹2種類(コナラ属コナラ亜属コナラ節、モチノキ属)が検出される。20片観察して、コナラ亜属が12片、モチノキ属が8片である。以下に検出された試料の解剖学的所見

を述べる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus subgen. Quercus sect. Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔閉部は1～3列、孔閉部外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔、壁孔は交互状に配列。放射組織は同性、単列、1～20細胞高程度のものと複合放射組織がある。

・モチノキ属(*Ilex*) モチノキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～6個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～5細胞幅、1～40細胞高。

(2) 放射性炭素年代測定

結果を表1、図12に示す。試料は、いずれも保存状態が良く、定法での処理が可能で、年代測定に必要な炭素量が回収できた。同位体補正を行った測定値は、モチノキ属が580±20BP、コナラ亜属コナラ節が490±20BPである。

暦年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは、Intcal13(Reimer et al., 2013)を用いる。2σの値は、モチノキ属がcalAD1310～cal1413、コナラ亜属コナラ節がcalAD1412～1445である。

表1 放射性炭素年代測定結果

| 試料名 | 種類 | 方法 | 補正年代 (暦年較正用) BP | $\delta^{14}\text{C}$ (%) | 暦年較正年代 | | | | | 確率% | Code No. |
|------------------|---------------|-----|-----------------------|------------------------------|--------|---------------|-------------|-------|-----------|------|----------------------|
| | | | | | 年代値 | | | | | | |
| B地点 C区 土坑1 | モチノキ属 (IM) | AAA | 580±20 (579±20) | -26.93 ±0.47 | ○ | cal AD 1320 - | cal AD 1350 | 630 - | 601 calBP | 47.0 | YU- pal- 10079 |
| | | | | | 2σ | cal AD 1392 - | cal AD 1406 | 559 - | 545 calBP | 21.2 | |
| | コナラ属 (IM) | AAA | 490±20 (488±20) | -27.52 ±0.61 | ○ | cal AD 1310 - | cal AD 1361 | 640 - | 590 calBP | 64.0 | 12255 |
| | | | | | 2σ | cal AD 1386 - | cal AD 1413 | 564 - | 538 calBP | 31.4 | |
| | | | | | | cal AD 1420 - | cal AD 1439 | 530 - | 511 calBP | 68.2 | |
| | | | | | | cal AD 1412 - | cal AD 1445 | 538 - | 506 calBP | 95.4 | |
| | | | | | | | | | | | 10080 |

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲) を年代値に換算した値。

4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。

5) 暦年の計算には、Calib v7.1を使用。

6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。

7) 較正データーセットは、Intcal13を使用。

8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、2 σ が95.4%である。

OxCal v4.3.2 Brook Ramsey (2017); r-5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al. 2013)

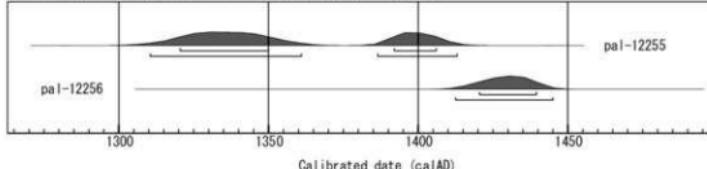
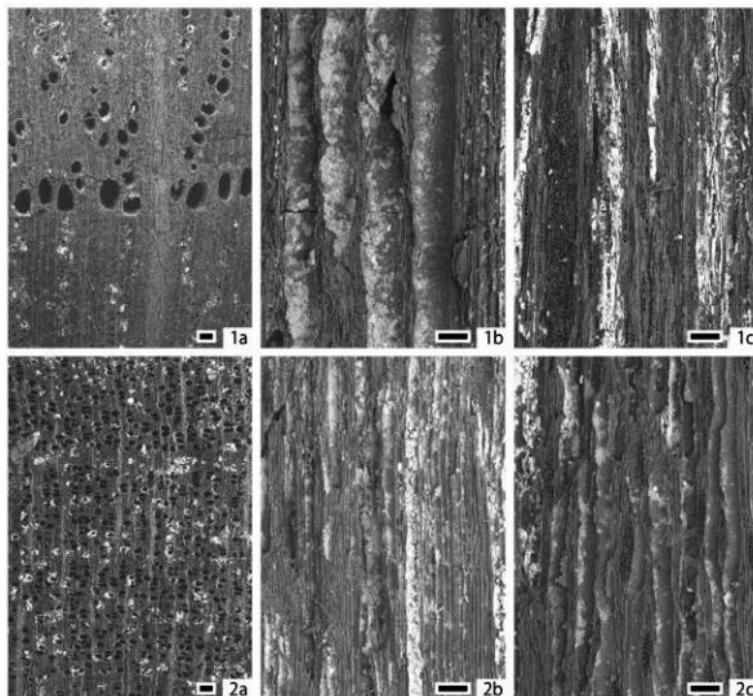


図12 暦年較正結果



1. コナラ亜属コナラ節(B地点C区土坑1)
2. モチノキ属(B地点C区土坑1)

a木口 b板目 c板目
スケールは100 μ m

図13 炭化材顕微鏡写真

4. 考察

B地点C区土坑1から出土した炭化材は、燃料材として使用したものが炭化・残存したものと推測される。いずれも1～3cm角程度の破片であり、使用時の形状等は不明である。このうち20点を抽出して樹種同定を実施した結果、コナラ節が12片、モチノキ属が8片であった。また、コナラ節とモチノキ属から各1点を選択して実施した年代測定で得られた結果を、暦年較正するとモチノキ属が calAD 1310～cal 1413、コナラ節が calAD 1412～1445である。

樹種同定で確認された2種類についてみると、コナラ節は二次林の主要な構成種となる落葉高木である。木材は重硬で強度が高く、薪炭材としては国産材の中でも優良な種類とされる。モチノキ属は、河畔等に生育する常緑あるいは落葉の高木～低木である。木材の材質には幅があるが、比較的重硬な部類に入る。

今回の結果から、土坑1では少なくとも2種類の木材が燃料材として利用されたことが推定される。確認された種類は、いずれも材質的には、比較的重硬な種類である。一般に、堅い木材は火付きが悪い

が、火持ちは良く、また燃え残り易い。確認された種類は人里近くで比較的普通に見られる種類であり、福井城跡の立地環境なども考慮すれば、木材を周辺で入手することは可能であったと考えられる。

伊東・山田(2012)のデータベースには、大阪府内や京都府内で中世の燃料材について樹種同定を実施した例は掲載されていない。一方、各樹種の利用例をみると、コナラ節は、平井遺跡(堺市)や高槻城堀削の杭(高槻市)、西ノ辻遺跡(東大阪市)や茄子作遺跡(枚方市)の挽物椀に確認された例がある。モチノキ属については、中世の資料に確認された例は認められないが、挽物や装飾などの小器具に使われる。

引用・参考文献

- Bronk RC.2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51:337-360
- 林昭三1991『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 : 81-181
- 伊東隆夫1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 : 66-176
- 伊東隆夫1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 : 83-201
- 伊東隆夫1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 : 30-166
- 伊東隆夫1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 : 47-216
- 伊東隆夫・山田昌久(編)2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社:449p
- Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatte C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J.2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0.50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55 : 1869-1887
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.(編) 2006『針葉樹材の識別—IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社:70p
[Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.(2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification]
- 島地謙・伊東隆夫1982『図説木材組織』地球社:176p
- Stuiver M., & Polach AH.1977 Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon,19 : 355-363
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(編) 1998『広葉樹材の識別—IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修)海青社:122p [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]

第3章 総括

今回の調査では、13世紀後半から15世紀前半にかけての遺物が多く出土し、14世紀半ばから15世紀前半にかけての遺構を検出することができた。

遺物の多くは包含層からの出土であり、地層の特徴から整地及び河川による堆積に際しての混入物であると考えられる。

土坑1は、15世紀の遺物を伴う遺構であるが、その埋土には焼土及び炭化材が充填されているとともに骨と釘が出土した。遺構の機能を推定するため炭化材の放射性年代測定および樹種同定を行い、年代測定では14世紀～15世紀を示し、樹種としては周囲の山で採取できる材で薪炭材であった可能性が高いという結果を得ることができた。中世に遡る土坑に焼土や炭化材が充填される例を摂津において探してみると箕面市粟生間谷遺跡及び箕面市止々呂美城跡で類似する土坑が複数検出されている。いずれも被熱した土が土坑の側面や底面に認められ、釘と炭が出土している。また、一部では人骨が出土しており、火葬土坑として報告されている。棺台として石を敷く例もあり、骨と釘の出土も考慮するのであれば、当遺跡の土坑1は火葬土坑であった可能性が高いと言える。釘は棺桶に使用したものであろう。

土坑1以外にも土坑や溝を検出したが、その機能及び用途を判断するには至らなかった。ただし、15世紀前半に葬地として機能していた以外は基本的に耕作地として機能しており、15世紀以降の佐保川による堆積とそれを母材とした耕作が現代まで連なっていると判断できる。

最後に福井城との関連についてまとめておきたい。第1章でも記したように福井城は14世紀前半に築城され16世紀前半まで存続した城と推測されている。今回の調査では、13世紀にまで遡る遺物が出土しており、茨木市教育委員会の調査においても13世紀の遺物が出土したことが記されている。福井城の築城が13世紀まで遡る可能性と福井城築城前に何らかの開発があったと推測できる。

13世紀において福井地域は、摂関家領福井荘として開発されていたことは第1章で記述したとおりである。平安時代末から鎌倉時代にかけて荘園開発による大規模開墾は大阪府内でも数多く確認されている。現段階においては、13世紀に遡る遺物は福井荘に関連するものと結論付けておきたい。

小規模な調査ではあったが、土地の変遷を考察できた点は大きな成果であった。この地においてやはり福井城の実態解明が重要である。福井城跡及び周辺のさらなる調査の進展に期待したい。

引用・参考文献

- 茨木市教育委員会2014『福井城跡現地説明会資料』
- 茨木市史編さん室2001「福井村村誌」「新修茨木市史 史料集2」村誌2
- 茨木市史編さん委員会2004『新修茨木市史』第八巻 史料編 地理
- 茨木市史編さん委員会2012『新修茨木市史』第一巻 通史1
- 茨木市史編さん委員会2014『新修茨木市史』第七巻 史料編 考古
- 茨木市史編さん委員会2016『新修茨木市史』第二巻 通史2
- 大阪府学務部1928『大阪府史蹟名勝天然記念物』第2冊 三島・豊能郡
- 大阪府教育委員会1990『西国・丹波街道』歴史の道調査報告書 第6集
- 大阪府教育委員会2017『西福井遺跡—一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う発掘調査—』大阪府埋蔵文化財調査報告
2016-2
- 大阪府教育委員会2018『西福井遺跡II—一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う発掘調査—』大阪府埋蔵文化財調査報
告2017-1
- 大谷暢順編1998『蓮如上人全集』第3巻諸文拾遺編 中央公論社
- 岡田 賢2018『西福井遺跡の発掘調査について - 府立福井高等学校建設に伴う発掘調査の概要 - 』『茨木市立文化財
資料館館報』第3号(平成28年度)
- 尾谷雅彦1994『天野山金剛寺出土の土釜埋藏土器について』『天野山金剛寺遺跡』 河内長野市遺跡調査会
- 木村健明2018『玉櫛遺跡出土の土壁』『茨木市立文化財資料館館報』第3号(平成28年度)
- 公益財團法人文化財センター 2014『止々呂美城跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第246集
- 財団法人大阪府文化財センター 1998『玉櫛遺跡』(財)大阪府文化財センター調査報告書第31集
- 財団法人大阪府文化財センター 2003『栗生間谷遺跡 古代・中世編』(財)大阪府文化財センター調査報告書第85集
- 高村勇士2015『東福井遺跡』『平成27年度冬季特別展歴史発掘おおさか2015—大阪府発掘調査最新情報—』大阪府立近
つ飛鳥博物館
- 中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 續 伸一郎2007『大阪の瓦質土器—南部地域を中心として—』『第26回 中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着—瓦
質土器を考える(前編)—』(発表資料集)
- 東城庵幾雄 出版年不明『東拱城址図誌』 大阪府立中之島図書館所蔵
- 中村博司1981『福井城』『日本城郭体系』第12巻大阪・兵庫 株式会社人物往来社
- 中村博司編2007『よみがえる茨木城』 清文堂出版株式会社
- 白鷹幸伯1997『鉄、千年のいのち』 株式会社草思社
- 平凡社2001『日本歴史地名大系』 28-[1] 大阪府の地名1
- 正岡大実2015『福井城跡』『平成27年度冬季特別展歴史発掘おおさか2015—大阪府発掘調査最新情報—』大阪府立近
つ飛鳥博物館
- 松木俊正1911か『福井村沿革誌』
- 森田 勉1982『14～16世紀の白磁の形式分類と編年』『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 山田幸一1981『壁ものと人間の文化史45』 財団法人法政大学出版局

【 遺物観察表 】

| 掲載番号 | 地区 | 遺構・層位 | 種類 | 器種 | 法量 (cm) (括弧内は重元量) | 口径 | 底径 | 高さ | 主な製作技法 (-手作業当部大) | 色調 | 胎土 | 焼成 備考 |
|---------|----|-------|------|----|-------------------|----|-----|------------------------------|---|-------------------|----|----------|
| | | | | | | | | | | 内 | 外 | 内 |
| 図10- 1 | C | 灰色砂 | 瓦器 | 碗 | (13.4) 2.5 | 残 | - | (内)ミガキ (外)ユビオササ (口縁)ナダ | 内10Y8/1灰白 外12.5Y8/1黄灰 断10Y8/1灰白 | 密(石英、長石) | 良 | |
| 図10- 2 | C | 灰色砂 | 瓦器 | 碗 | (13.0) 2.6 | 残 | - | (内)ミガキ (外)ナダ (口縁)ナダ | 内NS/0灰 外NS/0灰 断12.5Y8/1灰白 | 密(白色砂) | 良 | |
| 図10- 3 | C | 灰色砂 | 瓦器 | 碗 | (12.0) 3.15 | 残 | 1.7 | (内)不明 (外)ユビオササ (口縁)ナダ | 内15Y5/1灰 外15Y8/1灰白 断15Y7/1灰白 | 密 | 良 | |
| 図10- 4 | C | 灰色砂 | 瓦器 | 皿 | (13.4) 1.7 | 残 | - | (内)ナダ (外)ユビオササ (口縁)ナダ | 内16/0灰 外16/0灰 断12.5Y8/2灰白 | 密(石英、長石) | 良 | |
| 図10- 5 | C | 灰色砂 | 瓦器 | 皿 | (12.0) 2.0 | 残 | - | (外)ナダ (口縁)ナダ | 内12.5Y8/2灰白 外12.5Y8/2灰白 断12.5Y8/1灰白 | 密(微細な白砂粒) | 良 | |
| 図10- 6 | C | 灰色砂 | 瓦器 | 皿 | (12.8) 1.9 | 残 | - | (外)ユビオササ (口縁)ナダ | 内12.5Y7/1灰白 外12.5Y7/1灰白 断12.5Y7/1灰白 | 密(石英、長石) | 良 | |
| 図10- 7 | C | 灰色砂 | 土師器 | 皿 | (9.8) 2.5 | 残 | - | (外)不明 (口縁)ナダ | 内12.5Y8/1灰白 外12.5Y8/1灰白 断12.5Y8/1灰白 | 密(石英、長石) | 良 | |
| 図10- 8 | C | 灰色砂 | 土師器 | 皿 | (9.8) 2.2 | 残 | - | (外)ユビオササ (口縁)ナダ | 内12.5Y8/1黄灰 外12.5Y8/1黄灰 断12.5Y8/2灰白 | 密(石英、長石) | 良 | |
| 図10- 9 | C | 灰色砂 | 須恵器 | 皿 | (10.0) 1.7 | 残 | - | (内)ナダ (外)ユビオササ (口縁)ナダ | 内NA/0灰 外NA/0灰 断NA/0灰白 | 密(長石、雲母) | 良 | |
| 図10- 10 | C | 灰色砂 | 須恵器 | 皿 | (9.0) 1.7 | 残 | - | (外)ユビオササ (口縁)ナダ | 内NA/0灰 外NA/0灰 断12.5Y8/2灰白 | 密(石英) | 良 | |
| 図10- 11 | C | 灰色砂 | 土師器 | 皿 | (11.0) 2.45 | 残 | - | (内)ナダ (外)ナダ (口縁)ナダ | 内17.5Y8/4にぶい根 外17.5Y8/4にぶい根 断17.5Y8/4にぶい根 | 密(クサリ繩、金 雲母) | 良 | |
| 図10- 12 | C | 灰色砂 | 土師器 | 皿 | (11.0) 2.35 | 残 | - | (内)ナダ (外)ナダ (口縁)ナダ | 内10Y8/3にぶい黄根 外10Y8/2灰黄根 断10Y8/3にぶい黄根 | 密(クサリ繩、金 雲母含む) | 良 | |
| 図10- 13 | C | 灰色砂 | 土師器 | 皿 | (10.4) 1.6 | 残 | - | (外)ユビオササ (口縁)ナダ | 内10Y8/4にぶい黄根 外10Y8/4にぶい黄根 断10Y8/4にぶい黄根 | 密(白砂、クサリ 繩) | 良 | |
| 図10- 14 | C | 灰色砂 | 土師器 | 皿 | (8.6) 1.5 | 残 | - | (外)ナダ (口縁)ナダ | 内17.5Y8/4にぶい根 外17.5Y8/4にぶい根 断17.5Y8/4にぶい根 | 密(石英、長石) | 良 | |
| 図10- 15 | C | 灰色砂 | 土師器 | 皿 | (8.0) 1.4 | 残 | - | (内)ハケメ (外)ナダ (口縁)ナダ | 内10Y8/3にぶい黄根 外10Y8/3にぶい黄根 断10Y8/3にぶい黄根 | 密(クサリ繩、金 雲母) | 良 | |
| 図10- 16 | C | 灰色砂 | 土師器 | 皿 | (8.0) 1.3 | 残 | - | (内)ハケメ (外)ナダ (口縁)ナダ | 内17.5Y8/4にぶい根 外17.5Y8/4にぶい根 断17.5Y8/4にぶい根 | 密(クサリ繩、金 雲母) | 良 | |
| 図10- 17 | C | 灰色砂 | 土師器 | 皿 | (9.0) 1.5 | 残 | - | (内)ナダ (外)ナダ (口縁)ナダ | 内17.5Y8/4にぶい根 外17.5Y8/4にぶい根 断17.5Y8/4にぶい根 | 密(石英、長石) | 良 | |
| 図10- 18 | C | 灰色砂 | 土師器 | 皿 | (7.8) 1.25 | 残 | - | (内)ナダ (外)ナダ (口縁)ナダ | 内10Y8/4にぶい黄根 外10Y8/4にぶい黄根 断10Y8/2にぶい黄根 | 密(クサリ繩、金 雲母) | 良 | |
| 図10- 19 | C | 灰色砂 | 土師器 | 皿 | (8.0) 1.2 | 残 | - | (内)ハケメ (外)ナダ (口縁)ナダ | 内10Y8/5にぶい黄根 外10Y8/3にぶい黄根 断10Y8/3にぶい黄根 | 密(クサリ繩、金 雲母) | 良 | |
| 図10- 20 | C | 灰色砂 | 土師器 | 皿 | (9.0) 1.6 | 残 | - | (内)ナダ (外)ナダ (口縁)ナダ | 内12.5Y7/3淡黄 外12.5Y7/3淡黄 断2.5Y7/3淡黄 | 密 | 良 | |
| 図10- 21 | C | 灰色砂 | 土師器 | 皿 | (7.2) 1.0 | 残 | - | (内)ナダ (外)ナダ (口縁)ナダ | 内17.5Y8/3にぶい根 外17.5Y8/3にぶい根 断17.5Y8/3にぶい根 | 密(石英、長石) | 良 | |
| 図10- 22 | C | 灰色砂 | 土師器 | 皿 | (7.0) 2.15 | 残 | - | (内)不明 (外)不明 (口縁)ナダ | 内10Y8/4淡黄根 外10Y8/4淡黄根 断10Y8/4淡黄根 | やや粗(石英、長 石) | 良 | |
| 図10- 23 | C | 灰色砂 | 瓦質土器 | 蓋 | (12.2) 2.5 | 残 | - | (内)不明 (外)ナダ (口縁)不明 | 内12.5Y7/2灰黃 外14/0灰 断12.5Y7/2灰黃 | 密(石英、長石) | 良 | |
| 図10- 24 | C | 灰色砂 | 瓦質土器 | 羽釜 | (14.8) 3.2 | 残 | - | (内)ナダ (外)ユビオササ (口縁)ナダ | 内NA/0灰 外NA/0灰 断12.5Y8/2灰白 | 密(石英、長石) | 良 | |
| 図10- 25 | C | 灰色砂 | 灰軸陶器 | 輪 | (13.4) 2.0 | 残 | - | (内)灰軸 (外)灰軸 (口縁)灰軸 | 内15Y7/3淡黄 外15Y7/3淡黄 断12.5Y8/2灰白 | 密 | 良 | |

| 掲載番号 | 地区 | 遺構・層位 | 種類 | 器種 | 法量(cm/底面内寸法) | 底径・高台径 | 主な製作技法 (一脉承継の次第) | 色調 | 胎土 | 焼成/ 備考 |
|---------|----|-------|------------|----|--------------|--------------------------|--|--|-------------------|---------------|
| | | | | | | | | | | |
| 国10- 26 | C | 灰色砂 | 東播磨 須恵器 | 鉢 | - | 残 4.6 | (内)回転ナデ (外)回転ナデ (口縁)回転ナデ | 内N7/0灰白 外N7/0灰白 断N7/0灰白 | 密(石英、長石) | 良 |
| 国10- 27 | C | 灰色砂 | 土師質 土器 | 鍋 | - | 残 4.8 | (内)ハケメ (外)ハケメ (口縁)ハケメ | 内N10Y7/4.1にぶい黄根 外N10Y6/2灰黄根 断S12.5T7/2灰黄 | 密(タサリ繩、金 雲母) | 良 |
| 国10- 28 | C | 灰色砂 | 土師質 土器 | 鍋 | (42.8) | 残 2.2 | (内)ハケメ (外)ナデメ (口縁)ナデメ | 内N10Y8/2灰白 外N10Y8/1根灰 断N10Y7/1灰白 | 密(石英、長石、 クラリ繩) | 良 |
| 国10- 29 | C | 灰色砂 | 瓦 | 丸瓦 | - | - | (四)布目土瓶 (内)不明 (端面)不明 (内)ミガキ (外)ミガキ (口縁)ナデ | 内S2.5T7/2灰黄 外S2.5T7/2灰黄 断S2.5T7/2灰黄 | 密(石英、長石、 砂岩) | 良 |
| 国10- 30 | C | 灰黄色砂 | 瓦器 | 椀 | (13.8) | 残 3.2 | (内)ミガキ (外)ミガキ (口縁)ナデ | 内N6/0灰 外N6/0灰 断S2.5T7/2灰黄 | 密 | 良 |
| 国10- 31 | C | 灰黄色砂 | 瓦器 | 椀 | (13.8) | 残 2.4 | (内)ミガキ (外)ユビオサメ (口縁)ナデ | 内N4/0灰 外N4/0灰 断S2.5S8/1灰白 | 密 | 良 |
| 国10- 32 | C | 灰黄色砂 | 瓦器 | 椀 | (14.0) | 残 3.1 | (内)ミガキ (外)ナデ (口縁)ナデ | 内N5/0灰 外S2.5T7/1灰白 断S2.5T7/1灰白 | 密 | 良 |
| 国10- 33 | C | 灰黄色砂 | 瓦器 | 椀 | (11.0) | 残 2.7 | (内)ミガキ (外)ユビオサメ (口縁)ナデ | 内S2.5W6/1黄灰 外S2.5W6/1黄灰 断S2.5T7/1灰白 | 密 | 良 |
| 国10- 34 | C | 灰黄色砂 | 瓦器 | 椀 | (11.0) | 残 2.6 | (内)ミガキ (外)不明 (口縁)ナデ | 内S15/7/1灰白 外S15/7/1灰白 断S15/8/1灰白 | 密 | 良 |
| 国10- 35 | C | 灰黄色砂 | 瓦器 | 椀 | (11.0) | 残 2.7 | (内)不明 (外)ユビオサメ (口縁)ナデ | 内S15/5/1灰 外S15/8/1灰白 断S15/8/1灰白 | 密 | 良 |
| 国10- 36 | C | 灰黄色砂 | 土師器 | 皿 | (15.0) | 残 2.15 | (内)不明 (外)不明 (口縁)不明 | 内S17.5W7/4にぶい根 外S17.5W7/3にぶい根 断S17.5W7/3にぶい根 | 密 | 良 |
| 国10- 37 | C | 灰黄色砂 | 土師器 | 皿 | (8.0) | 残 0.85 | (内)ナデ (外)ナデ (口縁)ナデ | 内N10Y7/3にぶい黄根 外N10Y7/3にぶい黄根 断N10Y7/3にぶい黄根 | 密(タサリ繩、金 雲母) | 良 |
| 国10- 38 | C | 灰黄色砂 | 白磁 | 椀 | (16.6) | 残 2.2 | (内)白磁袖 (外)白磁袖 (口縁)口壳 | 内S17.5T7/1灰白 外S17.5T7/1灰白 断S15/7/1灰白 | 密 | 良 |
| 国10- 39 | C | 灰黄色砂 | 土師質 土器 | 鉢 | (33.0) | 残 4.1 | (内)ナデ (外)ナデ (口縁)ナデ | 内S10Y8/2灰黄根 外S2.5T7/2灰黄 断S2.5T7/2灰黄 | 密 | 良 |
| 国10- 40 | C | 灰黄色砂 | 東播磨 須恵器 | 鉢 | - | 残 3.7 | (内)回転ナデ (外)回転ナデ (口縁)回転ナデ | 内N6/0灰 外N6/0灰 断N6/0灰 | 密(石英、長石) | 良 |
| 国10- 41 | C | 灰黄色砂 | 備前焼 | 楕鉢 | - | 残 6.5 | (内)回転ナデ (外)回転ナデ (底)ケズリ | 内S10Y8/1根灰 外S5/5/1灰 断S15/4/3にぶい垂垂 | 密 | 良 |
| 国10- 42 | C | 褐色砂 | 瓦器 | 椀 | (14.4) | 残 2.6 | (内)ミガキ (外)ナデ (口縁)不明 | 内S2.5W6/1黄灰 外S2.5W6/1黄灰 断S2.5W6/1黄灰 | 密 | 良 |
| 国10- 43 | C | 褐色砂 | 瓦器 | 椀 | (13.0) | 残 2.9 | (内)ミガキ (外)ナデ (口縁)ナデ | 内S2.5W6/1灰白 外S2.5W6/1灰白 断S2.5W6/1灰白 | 密 | 良 |
| 国10- 44 | C | 褐色砂 | 瓦器 | 椀 | - | 残 1.0 (4.4) (底) | (内)ミガキ (外)ナデ (口縁)ナデ | 内S2.5W6/1灰白 外S2.5W6/1灰白 断S2.5W6/1灰白 | 密 | 良 |
| 国10- 45 | C | 褐色砂 | 瓦器 | 椀 | (10.0) | 残 3.0 | (内)ミガキ (外)ナデ (口縁)ナデ | 内S2.5T7/1灰白 外S2.5T7/1灰白 断S2.5W6/1灰白 | 密 | 良 |
| 国10- 46 | C | 褐色砂 | 土師器 | 皿 | (10.4) | 残 1.5 | (内)不明 (外)不明 (口縁)不明 | 内S2.5W6/1灰白 外S2.5W6/1灰白 断S2.5W6/1灰白 | 密 | 良 |
| 国10- 47 | C | 褐色砂 | 土師器 | 皿 | (9.0) | 残 1.2 | (内)不明 (外)不明 (口縁)不明 | 内S15/7/6根 外S15/7/6根 断S15/7/6根 | 密(タサリ繩、金 雲母) | 良 |
| 国10- 48 | C | 褐色砂 | 東播磨 須恵器 | 鉢 | (31.5) | 残 3.25 | (内)回転ナデ (外)回転ナデ (口縁)回転ナデ | 内S15/7/1灰白 外S15/7/1灰白 断S15/7/1灰白 | 密 | 良 |
| 国10- 49 | C | 褐色砂 | 土師質 土器 | 鉢 | - | - | (内)ナデ (外)ナデ (口縁)ナデ | 内N10Y8/2灰白 外N10Y8/1にぶい根 断S2.5W6/4にぶい黄 | やや粗 | 良 |
| 国11- 50 | 4 | 燒土坑1 | 青磁 | 皿 | - | 残 2.2 | (内)青磁袖 (外)青磁袖 (口縁) - | 内S15/7/1明オリーブ灰 外S15/7/1明オリーブ灰 断S15/8/1灰白 | 密(石英) | 良/試掘調 査時出土 |
| 国11- 51 | 4 | 燒土坑1 | 土師器 | 皿 | (11.0) | 残 2.6 | (内)ハケメ (外)ナデメ (口縁)ナデメ | 内S15/7/6根 外S15/7/6根 断S15/7/6根 | 密(タサリ繩、金 雲母) | 良/試掘調 査時出土 |
| 国11- 52 | C | 土坑3 | 土師器 | 皿 | (7.0) | 残 1.15 | (内)ナデ (外)ナデ (口縁)ナデ | 内S17.5W7/4にぶい根 外S17.5W7/4にぶい根 断S17.5W7/4にぶい根 | 密 | 良 |

| 掲載番号 | 地区 | 造構・層位 | 種類 | 器種 | 法量(cm/底面内は復元値) | | | 主な製作技法 (□=模擬当面地) | 色調 | 胎土 | 焼成/ 備考 |
|---------|----|-------|------------|-----------|----------------|-----------|-------|--|---|---------|------------|
| | | | | | 口径 | 底径・ 高 | 高台径 | | | | |
| 岡11- 53 | C | 燒土坑4 | 土師器 | 皿 (12.4) | 残 1.7 | - | - | (内)ナデ (外)不明 (口縁)ナデ (内)回転ナデ | 内17.5/86.4/にい根 外17.5/86.4/にい根 断17.5/86.4/にい根 | 密(クサリ繩) | 良 |
| 岡11- 54 | C | 燒土坑4 | 東播系 須世器 | 鉢 (23.0) | 残 4.5 | - | - | (内)ナデ (外)不明 (口縁)ナデ (内)回転ナデ | 内17.5/86.1/灰 外17.5/86.1/灰 断17.5/86.1/灰 | 密 | 良 |
| 岡11- 55 | C | 燒土坑4 | 土師質 土器 | 羽釜 (17.6) | 残 5.9 | - | - | (内)ナデ (外)ナデ (口縁)ナデ (内)ハケメ (外)不明 (口縁)不明 | 内12.5/7.2/灰黄 外12.5/7.2/灰黄 断12.5/7.2/灰黄 | 密 | 良 |
| 岡11- 56 | C | 燒土坑5 | 壁土 | - | - | - | - | (表)白土 (裏)一 | 表12.5/8.2/灰白 裏12.5/7.2/灰黄 断12.5/7.2/灰黄 | 密 | 良 |
| 岡11- 57 | C | 溝8 | 土師器 | 皿 (11.6) | 残 1.7 | - | - | (内)ナデ (外)不明 (口縁)ナデ (内)ハケメ (外)不明 (口縁)不明 | 内17.5/88.2/灰白 外17.5/88.2/灰白 断17.5/88.2/灰白 | 密 | 良 |
| 岡11- 58 | C | 溝8 | 土師器 | 皿 (8.0) | 残 1.2 | - | - | (内)ナデ (外)ナデ (口縁)ナデ (内)ハケメ (外)不明 (口縁)不明 | 内17.5/86.2/灰褐 外17.5/86.2/灰褐 断17.5/86.2/灰褐 | 密 | 良 |
| 岡11- 59 | C | 溝10 | 瓦器 | 皿 (12.8) | 残 2.3 | - | - | (内)不明 (外)不明 (口縁)不明 | 内17.5/88.2/灰白 外17.5/88.2/灰白 断17.5/88.2/灰白 | 密 | 良 |
| 岡11- 60 | C | 溝10 | 土師器 | 皿 (16.0) | 残 2.0 | - | - | (内)不明 (外)不明 (口縁)ナデ (内)ナデ (外)ナデ (口縁)ナデ | 内17.5/87.2/明褐灰 外17.5/85.2/灰褐 断17.5/87.2/明褐灰 | 密(クサリ繩) | 良 |
| 岡11- 61 | C | 溝10 | 土師器 | 皿 (11.0) | 残 2.3 | - | - | (内)ナデ (外)不明 (口縁)ナデ (内)ナデ (外)ナデ (口縁)ナデ | 内17.5/87.4/にい根 外17.5/87.4/にい根 断17.5/87.4/にい根 | 密 | 良 |
| 岡11- 62 | C | 溝10 | 土師器 | 皿 (8.0) | 残 1.5 | - | - | (内)ナデ (外)ユビオサ (口縁)ナデ (内)ナデ (外)ナデ (口縁)ナデ | 内17.5/88.2/灰白 外17.5/88.2/灰白 断17.5/88.2/灰白 | 密 | 良 |
| 岡11- 63 | C | 溝10 | 土師質 土器 | 羽釜 (21.0) | 残 3.5 | - | - | (内)ハケメ (外)ナデ (口縁)ナデ (内)ナデ (外)ナデ (口縁)ナデ | 内12.5/8.5/にい根 外12.5/8.2/灰黄褐 断12.5/8.1/黄灰 | 密 | 良 |
| 岡11- 64 | C | 溝10 | 瓦質 器 | 搔鉢 | - | 残 3.85 | (9.2) | (内)回転ナデ (底)ケズリ (内)青磁跡 (外)青磁跡 (口縁)一 | 内17.5/7.1/灰白 外15/6.1/灰 断5/7.1/灰白 (内)青磁跡 (外)青磁跡 (口縁)一 | 密 | 良 |
| 65 | C | 灰色砂 | 青磁 | 碗 | - | 残 3.8 | - | (内)青磁跡 (外)青磁跡 (口縁)一 | 内12.5/6.6/1オリーブ灰 外12.5/6.6/1オリーブ灰 断12.5/8.1/灰白 | 密 | /開版のみ 良 |
| 掲載番号 | 地区 | 造構・層位 | 種類 | 器種 | 法量(cm/底面値) | 長さ | 幅 | 厚さ | 特徴 | | |
| 岡11- 66 | C | 灰色砂 | 鉄製品 | 釘 | 4.9 | 1.0 | - | | | | |
| 岡11- 67 | C | 灰色砂 | 鉄製品 | 釘 | 4.9 | 0.7 | - | | | | |
| 岡11- 68 | C | 灰色砂 | 鉄製品 | 釘 | 3.8 | 1.0 | - | | | | |
| 岡11- 69 | C | 灰色砂 | 鉄製品 | 釘 | 3.5 | 0.8 | - | | | | |
| 岡11- 70 | C | 灰色砂 | 鉄製品 | 釘 | 3.2 | 0.8 | - | | | | |
| 岡11- 71 | C | 灰色砂 | 鉄製品 | 釘 | 1.9 | 0.6 | - | | | | |
| 岡11- 72 | C | 灰色砂 | 鉄製品 | 釘 | 3.4 | 0.7 | - | | | | |
| 岡11- 73 | C | 灰色砂 | 鉄製品 | 刀子 | 6.7 | 2.0 | 1.0 | | | | |
| 岡11- 74 | C | 灰色砂 | 鉄製品 | 釜? | 3.5 | 8.0 | 1.0 | | | | |
| 岡11- 75 | C | 溝8 | 鉄製品 | 釘 | 3.8 | 0.7 | - | | | | |
| 岡11- 76 | C | 土坑1 | 鉄製品 | 釘 | 3.7 | 0.7 | - | | | | |
| 岡11- 77 | C | 土坑1 | 鉄製品 | 釘 | 3.2 | 0.4 | - | 巻頭釘 | | | |
| 岡11- 78 | C | 土坑1 | 鉄製品 | 釘 | 2.7 | 0.4 | - | | | | |

図 版

図版一 調査区Cの遺構(一)



a. 調査区全景 (東から)



b. 土坑1 全景 (南から)

図版二 調査区Cの遺構(二)



a. 土坑1完掘
(南から)



b. 焼土坑2検出状況
(北から)



c. 焼土坑2断面
(南西から)

図版三 調査区Cの遺構(三)



a. 土坑3 検出状況
(北から)



b. 土坑3・9 完掘
(北から)



c. 焼土坑4 完掘
(東から)

図版四 調査区Cの遺構(四)



a. 焼土坑5検出状況
(北西から)



b. 焼土坑5完掘
(南西から)



c. 土坑6完掘
(北東から)

図版五 調査区Cの遺構(五)

a. 土坑7完掘
(南西から)



b. 溝8完掘
(南から)



c. 溝10完掘
(南から)



図版六 調査区Cの地層断面(一)



a. 南側石垣及び段差
(西から)



b. 北壁西部断面
(南から)

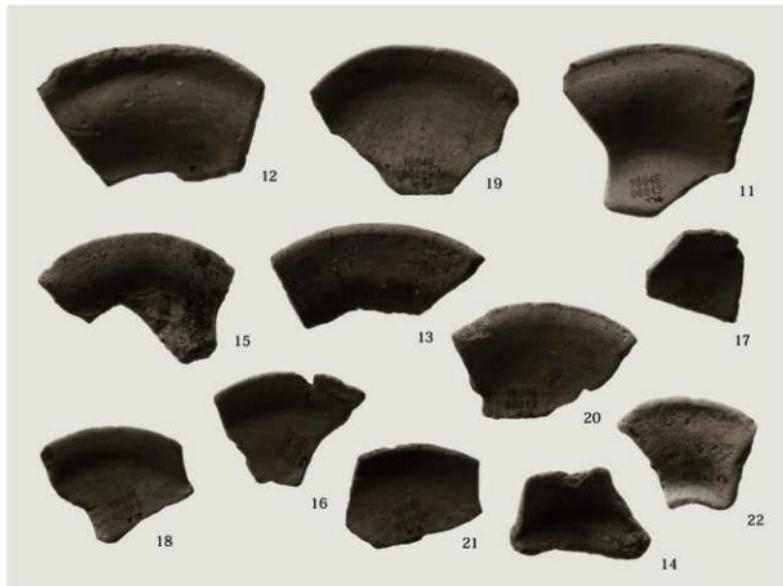


c. 北壁東部
(南から)

図版七 調査区C 包含層出土遺物（一）

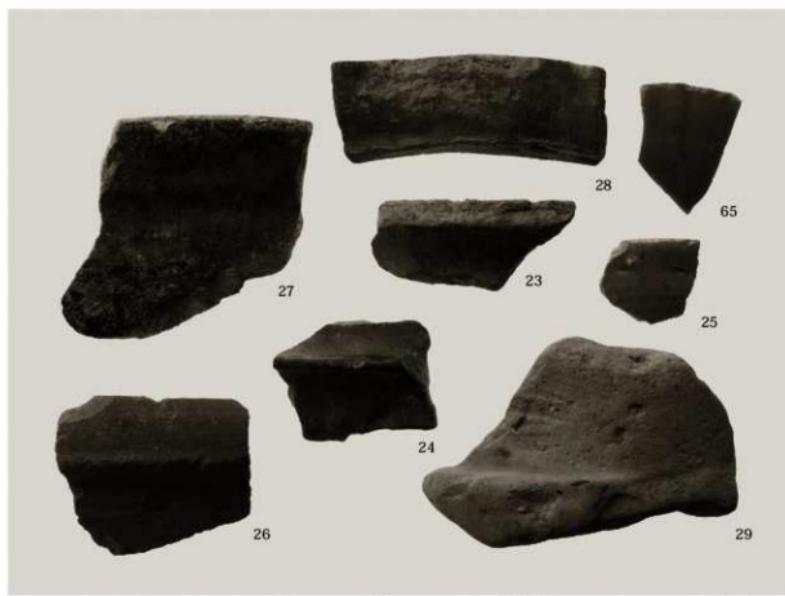


a. 包含層 瓦器 (1 ~ 10)

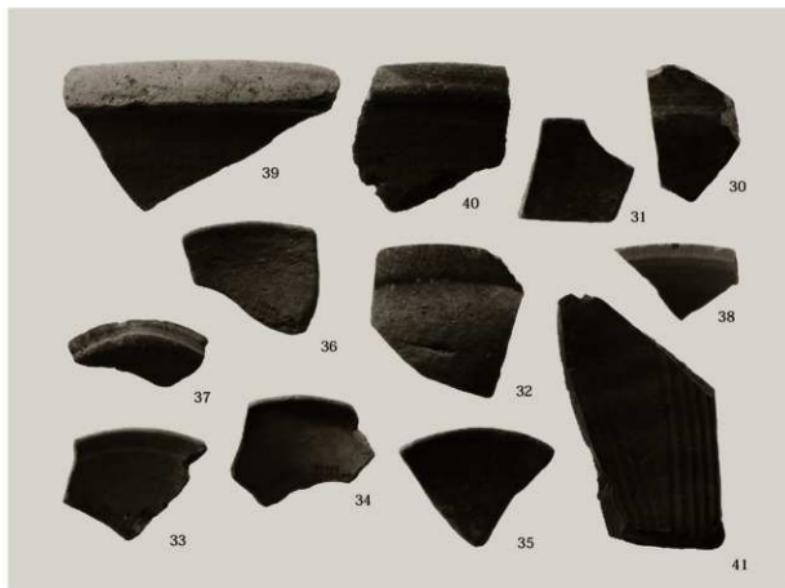


b. 包含層 土師器 (11 ~ 22)

図版八
調査区C包含層出土遺物(二)及び調査区C遺構出土遺物(一)



a. 包含層 瓦質土器(23・24)、灰釉陶器(25)、東播系須恵器(26)、土師質土器(27・28)、瓦(29)、青磁(65)

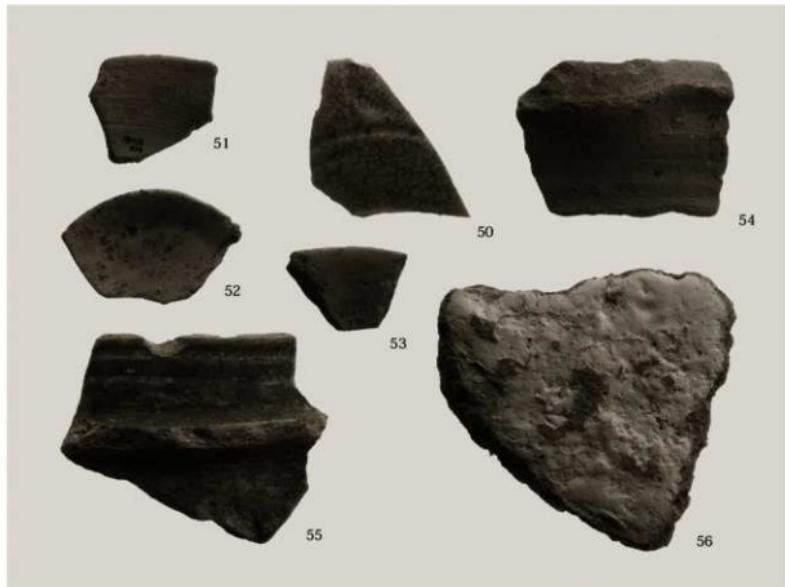


b. 包含層 瓦器(30～35)、土師器(36・37)、白磁(38)、瓦質土器(39)、東播系須恵器(40)、陶器(41)

図版九 調査区C 遺構出土遺物(二)

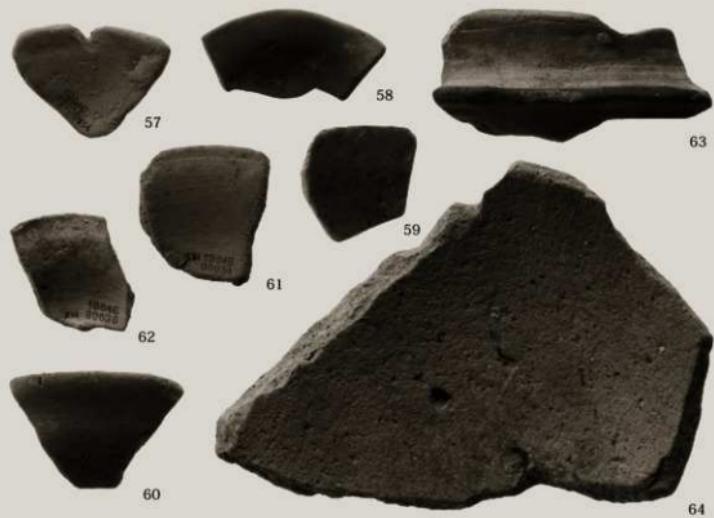


a. 包含層 瓦器(42～45)、土師器(46・47)、東播系須恵器(48)、土師質土器(49)



b. 遺構出土 青磁(50)、土師器(51～53)、東播系須恵器(54)、瓦質土器(55)、土壁(56)

図版一〇 調査区C遺構出土遺物(三)及び鉄製品(一)



a. 遺構出土 土師器(57・58・61・62)、瓦器(59・60)、土師質土器(63)、瓦質土器(64)



b. 包含層・遺構出土 鉄製品(66～74)

報告書抄録

大阪府埋蔵文化財調査報告2019－1

福井城跡B地点

—一般府道余野茨木線建設工事に伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会
〒540－8571 大阪市中央区大手前二丁目
TEL 06－6941－0351(代表)

発行日 令和2年3月31日

印刷 株式会社 カンブリ
〒556－0025 大阪市浪速区浪速東1-2-5
TEL 06－7654－1190